

## 第1講 講義の背景と目的

### 歴史研究の文化的環境の変化と歴史研究の変化

#### 1. 古代史研究における近代の影響

##### 近代ヨーロッパにおけるギリシア国家の地位の低さ・評価の低さの反映

財政破綻国家ギリシア、EUのお荷物などの昨今のメディアの見出しや記事

汚職と欺瞞と経済的な弱さ

『エコノミスト』誌（2009年12月19・26日合併号）

記事見出し「ギリシャの債務危機：柱を支えようと腐心するパパンドレウ首相」

記事「財政赤字と公的債務の大きさについて、何とか欧州連合（EU）の目をくらましてきた。」

記事「（パパンドレウ首相が）12月10日の欧州連合（EU）首脳会議では、ギリシャは汚職まみれであると認めて、他の首脳たちに衝撃を与えた。」

『エコノミスト』誌（2010年3月27日）

記事見出し「ギリシャ救済の本当のコスト欧州の支援策は「安全網」にならない」

記事「ギリシャはユーロ建て国債を発行する数多くの国の中で最も信用力の低い国だ。」

記事「浪費癖があるにせよ弱い国」

##### 近代ヨーロッパ文明の源流としての古代ギリシアの特権的地位

西洋における古典教養

ホメロス：ヘッセの『車輪の下』

合理主義

プラトンやアリストテレス

民主主義

ビクトリア朝時代のイギリス

##### 偉大な古代ギリシアと衰退した近・現代ギリシアとの乖離

観光客は現代ギリシアを観るのではなく、古代ギリシアを観ている

ギリシア正教・イスラムに対する低い評価

ビザンツ時代・トルコ時代の軽視ないしは無視の反映

現代ギリシアの軽視の反映

##### 偉大なギリシアの古代文明と退化したその子孫という図式

近代の西欧人の反応：シュリーマンにも見られる。これは一種のオリエンタリズム

スラブ人の血の混血説

自然環境の劣化（バーソロミュー）

古代ギリシア史をギリシア正教の現代ギリシアの枠外において評価

##### 国民国家史という近代歴史学の歴史観

ギリシア共和国と言う国民国家の枠の中で古代ギリシア史を構築  
南イタリアやシシリーのギリシア都市はイタリア史の中に  
マッシリアなどの南フランスのギリシア都市はフランス史の中に  
古代ギリシア人の世界の分断

#### 西洋中心主義

前5世紀、ペリクレス時代の理想化

古典考古学（美術考古学）：古典期のギリシア芸術を理想化

ギリシア史を西洋史の文脈の中に落とし込む

オリエント世界との関係性の脱落（ヘロドトスよりトゥキュディデス）

オリエントに対する優越性

男性中心→政治史・戦争史

西洋における資本主義の発展→古代経済を資本主義概念でアプローチ  
階級概念の援用

古代資本主義

近代的民族主義→ギリシア人を地名でなくギリシア民族という血縁集団で考  
える

ヨーロッパから不断のギリシアへの移住民の流れ（イオニア人・アカイア人・  
ドーリア人）

西洋的政治の価値観（民主主義）→アテナイを基準にギリシア史を再構成

アリストテレスを援用：王政→貴族政→民主政

ウェーバーの合理化：軍制の変化＝国防の主体の変化→国制の変化

市民団の解体→ギリシア世界の衰退。世界帝国で行き詰まり

マルクス主義：ソロンの改革→市民の奴隷化の禁止と購買奴隷制への転  
換

典型的な奴隷制社会→階級間の搾取・抑圧と緊張に注目